

# 技術を問う

技術の決定論、社会構成主義から批判理論へ

高幣秀知

これまでいくたびか、この国の政治が経済社会を破壊へと導いてきたとすれば、近年にあっては、そうした経済政治的社会的科学技術・学術をも破壊する利害関係のもとに再編してゆく動向が顕在化している。技術を哲学の問題として、政治理論としても問おうとする本書がこゝした時態に刊行されるこの意義は、とりわけ大きいといわなければならない。また、技術への規範的反省が「技術決定論」から「社会構成主義」さらには「技術の政治理論」そして「技術の批判理論」へと新しい段階にはいりつつあるとする著者たちからすれば、その問題設定の水準は、技術の政治的文脈にたいする哲学的センスを欠落させたかぎりの「構成主義」でも、また「現在ある技術を固定的なバックグラウンドとみなす」そのかきりでの応用倫理的アプローチなども、異なったものとなる。

著者フィーンバークについては、既に邦訳『技術—クリティカル・セオリー』（法政大学出版局、一九九五年）があり、また『思想』『技術の哲学』（特集）（岩波書店、二〇〇一年七月号）には、その論説「民主的な合理化」が紹介されていて著者近年のポジションを概観することが出来る。またこれら以外にも、『ルカーチ、マルクスそして批判理論の源泉』（一九八一年）がある。

三部に分かれた全八章の冒頭第一章では、一九六八年パリの「五月革命」がテクノクラシー的分業の廃絶を要求する「区テクノクラシー叛乱」との観点から概観されている。第二章では、人口増加に対応して必然的に環境汚染と資源枯渇がひきおこされるとする「マルサス主義者」エリックと、人口増加をとりわけ第三世界においては強いられ、た社会文化的貧困から、そして環境汚染を短期的な利益追求に誘導された産業技術・農業技術・政策から説明しようとするエリックとの長期にわたる論争が点検されている。環境汚染が避けがたく自分離の身よりかかる要因となるからといって、しかしながらそのことから必ずしも、労働者・組合などが被動的な対抗運動を先導するものなるというわけではない。むしろ、資源・商品の大量消費から大量廃棄への回路を「選択」させる動向が、アメリカだけに止まらず、全一般化されている。環境危機は階級闘争や民族紛争と連動しながら、「ふるくからの諸問題が闘い抜かれた新たな領域」となる。こうした事態にあつて、その技術とは何であるのか、何であることが出来るのか、問われなければならない。これが第一部の主題となる。

技術には社会・文化とは関係なく必然的に発達する経路があり、この経路は効率を追

求する自律的な機能論によって見出されるとする「技術決定論」の通念、あるいはテクノクラシーの俗論に対抗して、「技術の批判理論」は主張する。「技術は、支配的な利害関心によって数多くの可能な配置のなかから選択される。選択プロセスを導くのは、技術が入り込むことになる地平を定義する文化的・政治的闘争によって確立される社会コードである。いったん導入されると、技術は文化的な地平に物質的な安当性を与えるのである」（二二六ページ）。十九世紀中葉インダストリーにおける児童労働の廃絶とその結果としての生産性の向上、同じくアメリカにおいて頻発していた蒸気船ボイラーの爆発にたいする技術的改良命令とその通俗化といった事例は、その主張に適合的であり得ていよう。著者フィーンバークはまた、「あらゆる点で技術が人間のコミュニケーションに勝つてしまつたテクノクラシーの代わりに、われわれはいつの日か、技術発展が「コミュニケーション」の発展に役立つような民主的な社会をつくるかもしれないのである」（第四章）との積極的展望のもとに、様々な技術場面に関わる当事者としての利害関心をもつて「テクノカル・コード」の民主的な合理化と、選挙による技術制度のコントロールを結合させる戦略、「タイプな民主制化」（第五章）を提唱する。

この成否は、「結局のところ自己利益に関する実効的な意識における実現（第三章）に懸かるほかならぬことになる。たしかに、列挙される実例はそれぞれに説得的ではある。環境運動における法律や規制の変化、情報処理機械からコミュニケーション媒体へのコンピュータの変化、先進的な科学・技術が地域社会のエコロジカルな知識と協同して開発援助が成果をあげるケース、エイズ患者たちによる治療へのアクセス、パリテフリー・デザイン等々。しかし、他方では、汚染物質を大幅に削減することのできるボルトンが開発した扇状給気エンジンがセラールキータースなどによって拒絶されたケースは、技術のディープな合理化が機能しなかった事例に属するであろう。そして、原子爆弾を極点とする軍事技術の「展開」そしてそれも紹介した科学・技術の「発展」などを指して、技術における無数ともいへべき反・民主的な合理化が、「コミュニケーション」的な技術への様々な萌芽を仕舞いつくすかにもみえる。こうした事態にそれなりに正確に対応し、さらにはそれに拍車をかけているのがこれまでの哲学の側面、そして技術をめぐる理論の側面の決定的なまでの立ち遅れである。これが第三巻で論じられる。

（北海道大学教授／哲学・社会思想史）